

総理もネトウヨもみな虚人である

小説家は様々な人格に憑依し、その欲望、苦悩、屈折、悪意を我が身に引き受けながら、書く。誰に依頼されたわけでもないのに、そうやって他者の秘密を嗅ぎ回るスパイ活動をしている。解離性人格障害そのものを商売にしているといっても過言ではない。他人が背負った過去や罪をどう引き受けるか？それが問題だ。小説を書くこと自体が、患者と分析医の二役を兼ねるということであり、自身の中に複数の交代人格を育て、それらを巧みに統制するということでもある。

七十年代初頭の日本で、七つの化身を使い分け、悪の枢軸「死ね死ね団」と戦ったレインボーマンは私の小学生時代のヒーローである。私は自らもレインボーマンになり、資本主義的謀略と戦うことを夢見たが、ヘタレだったので、小説家になってしまった。

しかし、悪に立ち向かうヒーローを続々、世に送り出すことによって、思春期初期の誓いは守り続けてきた。『虚人の星』の解離障害に苦しむ少年とは私自身のことには他ならない。孤高の文学青年だった私は大学生になると、冷戦時代の世相を受け止め、ロシアン・スタディーに進み、卒業後は外交官か、企業のロシア駐在員になろうと考えたこともあった。主人公星新一には小説家にならなかったもう一人の自分が反映されている。

ある日気づくと、中国のスパイにさせられていた星新一の物語を通時的な縦糸にし、共時的な横糸に世襲総理の暴走と苦悩を織り込む。これが『虚人の星』の基本構造である。七つの人格を駆使して、謀略逆巻く日中間をコウモリのように暗躍するレインボーマン二世と、やはり自身の心のうちに危険なナショナリストの人格を抱え込んだ世襲総理は、互いに異なる境遇に生まれ育ち、全く別々の場所において、出会うはずもなかったが、一方が「売国奴」になり、もう一方が「極右」になることで、引き寄せの法則が働く。両者に似たところがあるとすれば、どちらも嘘つきだということ。

スパイは二重三重の嘘をつき、時に自分さえも欺く。七つの交代人格の意見も立場も異なるので、元々、本心なんてものはない。臨機応変に態度と言動を変え、秘密を盗み出す。総理もまたコトバと行動の矛盾を積み上げてゆく。憲法を遵守すると誓いながら、違憲行為を繰り返し、平和主義を唱えながら、戦争準備に余念がない。富の再分配と利益還元を呼びかけながら、福祉を削っている。誠実な人間なら、深刻な心の病は避けられない。

二人とも自分の行いを「組織のため」、「国家のため」と正当化し、矛盾と罪悪感を解消しようとする。あくまでも素の自分はひた隠しにしなければならないが、心のバランスを取るために、それぞれの一人称を通じて、諜報の前線と政権の中核で起きている出来事を赤裸々に告白するのだ。一人称はその人の喜怒哀楽、コンプレックス、悪意や善意、狂気をも露にしてしまう。その告白はむろん、おのが胸の内に秘めておかなければならないのだが、小説はそれをこっそり読者に暴露できるのである。警察官や外交官がその内幕を暴露すれば、特定秘密保護法で罰せられるが、職を辞し、小説を通じて暴露をしても何ら咎めを受けることはない。その原理と同じである。

『虚人の星』を『群像』に連載していた時期は安倍極右政権と重なる。作中の総理のモデルは安倍晋三ではないが、安保法制を巡る国会答弁にしても、折々の総理の発言にしても、虚言やすり替えや誤摩化しのオンパレードで、このような支離滅裂な人物に国政を委ねること自体が国家存立の危機だと思った。議会制民主主義はそうした危機を招いてしま

うことに多くの国民が気づき、異論を唱えたり、デモに参加したりと理性的な行動に出たのだった。安倍を退陣に追い込んでも、対米従属、日米安保堅持、改憲の方針を踏襲する別の総理が現れるだろう。彼らの暴走に歯止めをかける保険として、サヨクには復活してもらう必要がある。元祖『優しいサヨク』は戦後七十年の年に是が非でも『虚人の星』を上梓しなければならなかった。

本作は日本の現在の安全保障問題を解決するための「代案」を提出している。こちらの方が自民党の安保法案より百倍現実的である。対米従属と戦前回帰以外の選択肢がないと思込まされた人々も、本作の二人、スパイの星新一や首相の松平定男のように抑圧された自我を解放しさえすれば、何が正義かに気づくはずである。